

初心者のための合奏指導法の研究  
スコアリーディングから合奏へ

A study of the way of guiding an ensemble for the beginner  
To the ensemble from the score leading

田 端 利 則

# 初心者のための合奏指導法の研究

## スコアリーディングから合奏へ

A study of the way of guiding an ensemble for the beginner  
To the ensemble from the score leading

田 端 利 則

### 1. はじめに

合奏の指導を始めるとき、「何から始めたらいいのだろう」「練習はどのように進めたらいいのだろうか」と考えてしまいます。実力を伸ばすためには基礎訓練が必要なことは承知していても、いざ自分でやろうとすると悩んでしまいます。

ベテランの指導者にアドバイスを求めている様々な意見があり、参考となる本を読んでも色々な方法が紹介されている。どうしたらよいか途方にくれるばかり、思い切って始めてみても中途半端な結果になってしまう。このような経験を持つのは私だけではないと思う。幼児教育の現場の指導者からも合奏の指導に関する悩みをよく聞きます。

このような悩みを持つことになるであろう幼児教育学科生と、スコアリーディングから合奏へのプロセスについて考えることにした。

### 2. 対 象

曲 名 「宇宙戦艦ヤマト」(\*1) [1]  
作 曲 宮川 泰  
編 曲 山下 国俊

出版社 ミュージックエイト  
対 象 幼児教育学科2年生 42名

### 3. 方 法

- 1) スコアリーディング(\*3)  
コンデンススコア(\*2)を読む
  - ①スコアからの抽出(スコアを見て「分ること」と「分らないこと」)
  - ②記号による分類 [2]  
表情、速度、合奏、強弱、その他
- 2) 旋律演奏
  - ③鍵盤ハーモニカによる旋律の演奏
    - a, 主旋律を捜す
    - b, プレスを考える
    - c, 強弱を考える
    - d, 曲想と表現(奏法)を考える
    - e, 裏の声を考える
- 3) アナリーゼ
  - ④裏の声の分類 [3]  
主旋律と裏の声(オブリガート、フィラー、和声、バス、リズム) [4]
- 4) 鍵盤ハーモニカ合奏
  - ⑤鍵盤ハーモニカ合奏

主旋律とバスによる合奏

主旋律と裏の声の合奏

#### 5) 器楽合奏

(楽器編成、パートの決定)

##### ⑥分 奏

楽器の奏法の統一

##### ⑦合 奏

指揮、指導、編曲

#### スコアを読む

合奏指導では、音を出す前のスコアを読む作業が大切である。しかし、スコアを初めて目にする学生にとってスコアを読み、合奏を進めていくことなど想像もつかないことである。そこで、スコアを読む手掛かりとして、スコアを見て“わかること”と“わからないこと”を捜すことから始めることにした。

スコアを見てすぐ目に付くのが記号である。記号には、表情に関する記号、速度に関する記号、強弱に関する記号、楽器名に関する記号、その他の記号(省略記号など)がある。この記号を調べることにより、曲の速さ、楽器編成、曲の構成、曲の演奏順序、編曲などの曲の概要を知ることが出来る。

わかることとわからないことの抽出、記号による分類は、スコアへの抵抗感をなくすためには有効な方法でもあった。

#### 鍵盤ハーモニカによる旋律演奏

クラリネットやフルートと同じ吹奏する楽器である鍵盤ハーモニカは、ブレスが必要な楽器である。ブレスに関する指導は楽器の音色やフレーズと深い関わりを持ち重

要である。合奏でのブレスの指示や統一は必要不可欠な要素である。

旋律演奏においてはブレスをチェックし、フレーズについて考える。また、今演奏している音はどこへ向かっているのか、どこへ到達させるのか、その音やフレーズのディレクション(direction)についても考える。表現に必要なデユナーミックやイントネーション、タンギングなどの基本奏法の訓練も行う。

また、鍵盤ハーモニカの指導においては、運指、ブレス、フレーズ、息の量と息のスピード、息のコントロール(強奏と弱奏)、マルカートとテヌートなどについて考えなければならない。

#### 裏の声の分類

曲には主旋律がある。主旋律を捜すことは、それ以外のパート”裏の声”の存在を知ることになる。裏の声にはオブリガート(助奏)、フィラー(飾り)、バス、和声、リズムなどがある。裏の声の役割や特徴を考えることは曲の構成や編曲について考えることになる。

#### 鍵盤ハーモニカ合奏

旋律とバスパートに裏の声のパートを一つずつ充填していく。これによりパート間の遠近感を考え、スコアが立体的に構成されていることを体験する。さらに、鍵盤ハーモニカだけの合奏では、立体感や遠近感を表現する方法としてバランスや奏法の統一など合奏の要素について考える。

## 分 奏

分奏においては、奏法や表現方法の違う楽器を合奏でまとめるためのトレーニングを行う。合奏は色々な音色や力を持った楽器の組み合わせである。各楽器のアーティキュレーションやイントネーションの統一など楽器の基本奏法の指導を分奏で行う。また、打楽器の調整（皮の張り、撥）電子楽器のピッチ調整などのチェックすることも大切である。

## 合 奏（アナリーゼと合奏のまとめ方）

合奏において指導者は、スコアを色々な面から考えていかなければならない。

曲の構成（曲のつくり、クライマックス、組み立て）

楽器編成（楽器、人数、音色、音のブレンド、音量）

編 曲（編曲のねらい、横の流れ、縦の積み重ね、旋律と裏の声）

指 揮（バトンテクニック、トレーニング）

## 楽器編成

鍵盤ハーモニカ（ソプラノ、アルト、テナー、バス）、ソプラノリコーダー、シンセサイザー、ピアノ、木琴、鉄琴、大太鼓、小太鼓、シンバル

山下国俊氏の編曲ではソプラノ・アルト・テナー・バスの4種のアコーディオンによる編成であるが、本学の所有楽器の事情と学生に鍵盤ハーモニカの奏法を体得させる

目的から、ソプラノ・アルト・テナー・バスの鍵盤ハーモニカで演奏することにした。

また、バランスの問題からバスパートに電子楽器（シンセサイザー）を加えることにした。すべての楽器を全員が体験できれば理想的であるが、担当パートは希望により決定した。

## 楽器の組み合わせについて

楽器はそれぞれ特有の音色、音量、表現方法を持つ。その組み合わせが器楽合奏である。楽器の組み合わせには、同種の楽器の組み合わせと異種の楽器の組み合わせがある。

同種の楽器は簡単にブレンドしやすいが、ブレンドし過ぎて埋没してしまう危険を考えなければならない。異種の楽器の場合はブレンドさせるのか、対比させるのかを判断しなければならない。異種の楽器をブレンドさせる場合は楽器間の接着剤の役割をする楽器を発見することが大切になってくる。[3]

スコアには明確に記入されているものと明確に示されていないが読み取り判断すべきものがある。<sup>(\*)</sup>合奏の指導者はスコアの表面に書かれている内容だけではなく、その裏に隠れていることを読み取り、演奏者の人数や所有する楽器、園児の演奏力などの条件を考え、総合的に合奏を組み立てていかなければならない。

## 4. 「宇宙戦艦ヤマト」の合奏 (アナリーゼ、演奏の留意点)

前奏 ~ A (1小節~10小節)

前奏部の最初の4小節はソプラノ・アルト・テナーのポリフォニックな動きで開始され、徐々にcresc.し4小節目(4拍)でtuttiとなる効果的な作りとなっている。しかし、実際に演奏してみるとポリフォニッ

ク的な演奏効果がほとんど得られなかった。ポリフォニックな効果を出すためにバランスの調整や異なる音色を持つ楽器の追加、音域の変更などを試みたが、あまり良い結果が得られなかった。

7小節~8小節にかけてのcresc.は、リズムパターンの繰り返しによる対比で表現し、9小節目の到達点に達する。9小節目からの8拍の全音符は徐々に減衰していくことにな

るが、到達点である9小節目の最初のアクセントには8拍分の大きなエネルギーを持たせるように演奏することが大切である。

A ~ B (11小節~19小節)

旋律

バス

飾り

和声

前奏が終わり、いよいよヤマトの主旋律が登場する。この部分は、旋律とバス、木琴のフィラーだけのシンプルな造りで始まり、15小節から和声のパートの積み重ねによるcresc.となり17小節 (tutti) で大きな盛り上がりを持つことになる。

主旋律は、マルカート奏法で、バスは4分音符をマルカート・アクセント気味に演奏することによりマーチ的な雰囲気を持たせたい。和声は、全音符による吹き流しで横の流れと音量の変化にその役割を果たす。

コンデンススコアは省略が多く、このスコアは打楽器のパートがほとんど記入されていない。合奏の前にパート譜より追加記入しておくことが必要である。独特の音色と他を圧倒する力を持つ打楽器は、演奏の変化に大きな役割を果たす。しかし、打楽器が全体を壊している演奏も良く耳にする。全体から飛び出さないようにバランスに注意し、効果的に使うことを考えなければならない。また、各楽器の奏法や撥、楽器の調整にも注意を払うことが必要である。

□B ~ □C (20小節~24小節)

The musical score consists of four staves. The first staff is labeled '旋律' (Melody) and starts at measure 20. The second staff is labeled '対旋律' (Counter-melody) and also starts at measure 20, with a '飾り' (Ornament) marking above measure 23. The third staff is labeled '和声' (Harmony) and starts at measure 20. The fourth staff is labeled 'バス' (Bass) and starts at measure 20. The key signature has one flat (B-flat), and the time signature is 4/4.

□Bに入り、新たな要素として対旋律が登場する。主旋律はマルカート奏法で歯切れ良く演奏するが対旋律は主旋律とは対照的にレガート奏法で演奏する。この部分は二つ旋律の対比が大きな特徴となっている。指揮においても、主旋律を中心に叩きで振るのか、対旋律を平均運動で振るのか、工夫が必要な部分でもある。[7]

スコア上では主旋律が、対旋律のオクター

ブ下に記入されているが、実際の演奏では、主旋律がほとんど聞こえず音域に問題があった。そこで、オクターブ上げて演奏することにした。演奏に際しては2つのバランスに十分注意することが必要である。

和声は、旋律などのような自主性はないが横の流れを作る重要な役割を持つ。このパートは特に旋律に対するバランスに注意することが大切である。

□C ~ □D (25小節~33小節)

The musical score consists of four staves. The top staff is labeled '旋律' (Melody) and starts at measure 25. The second staff is labeled '和声' (Harmony) and starts at measure 25. The third staff is labeled '対旋律' (Counter-melody) and starts at measure 25. The bottom staff is labeled 'バス' (Bass) and starts at measure 25. The score is divided into two sections, C and D, starting at measure 25. Section C (measures 25-28) features a strong counter-melody and harmony. Section D (measures 29-33) features a main melody and counter-melody. The dynamic marking is mp (mezzo-piano).

□Cは29小節で大きな場面転換が行われている。25小節~28小節は主旋律と中低音で奏される力強い対旋律、和声から成っている。主旋律は2分音符が主体となり、それまでのマルカート奏法から長い音を主体としたテヌート奏法となる。アクセント奏法で演奏する対旋律との対比をはっきりさせたい。

29小節からは全体がmpとなり、主旋律もスラーが付き穏やかな表情となる。テナーに現れるオブリガートも印象的である。パート間の音量コントロール（強弱の変化）と奏法の変化で場面転換を明確に表現したい。しかし、和声部とテナーのオブリガートの音域が重な

り、効果が現れにくい造りとなっている。バランスの調整など演奏上の工夫が必要な部分である。

31小節からは、32~33小節のクライマックスに向けて大きな盛り上がりを作っていく。31小節からのcresc.に始まるエネルギーは、32~33小節へと持続させ、低音と打楽器によるリズムで、ますます大きなエネルギーとなり、印象的なシンバルのソロへと続いていく。31小節から高音部に現れるトリル (tr) は、賑やかさを出すための汚しであり、出過ぎないようにその扱いに注意が必要である。



[D] ~ [D.S] (34小節~43小節)

The image shows four staves of musical notation for measures 34 to 43. The top staff is labeled '旋律' (Melody) and starts at measure 34. The second staff is '対旋律' (Counter-melody) and also starts at measure 34. The third staff is '和声' (Harmony) and starts at measure 34. The bottom staff is 'バス' (Bass) and starts at measure 34. All staves have a key signature of one flat and a common time signature. Measure numbers 34, 38, and 39 are indicated. A first ending bracket labeled '1.' spans measures 39-43 in all parts.

[D]から4小節間は[B]の繰り返しであるが、38小節目は1拍目の後、主旋律以外の全て(裏の声)が3拍間休符(停止)となる。この3拍間のエネルギーの圧縮は、39小節で開放され、大きな盛り上がりへと進んでいく。

39小節から4小節間の全音符は、DからDmへコード進行し、大きなエネルギーを持って演奏されるので早く減衰しないように注意しなければならない。

The image shows two staves of musical notation for measures 44 to 47. The top staff is a drum part with a '2.' marking above it, indicating a second ending. The bottom staff is a bass part, also with a '2.' marking above it. Both staves start at measure 44. Measure numbers 44 and 47 are indicated. The notation includes various rhythmic patterns and rests. The text 'D.S.' appears at the end of both staves.

44小節からの小太鼓によるドラムマーチソロは、リズムが本来持つアクセントに注意し、緊張感を持って演奏しなければならない。他

のパートは、マルカート・アクセントを大切にインザッツを揃えることが大切である。



コーダは、中低音の重厚な2分音符の動きと3連符を含む変則的なリズム（3拍・3拍・2拍・2拍）で構成される。この部分は非常に振り難い部分であり、指揮に工夫が必要な部分である。

## 5. 合奏指導のチェックポイント

スコアリーディングから合奏への試みを通して合奏指導について考えてきた。指導者は合奏を総合的に考え、計画的で効率の良い合奏を進めなければならない。そこで、効率のよい合奏を行うための指導のチェックポイントを考えてみた。

### 合奏指導のチェックポイント [6]

1. 楽器が良い音が出る状態に整備されているか。
2. 打楽器の奏法、音色（スティック、マレット等）、バランスを意識しているか。
3. 個々の楽器が正しい奏法、良い音で演奏しているか。
4. 発音は明瞭か、アインザッツはあっているか。
5. 適切なフレージングによって演奏されているか。
6. 音の長さ、休符は正確に表現され、正しいリズムで演奏されているか。
7. イントネーション、アーティキュレーション

の処理は適当か。

8. 音楽的な要求によるテンポ設定や拍子感は正確に表現されているか。
9. 曲のスタイルにあった奏法によって表現されているか。
10. ダイナミックレベルをよく表現しているか。
11. クレッシェンドとディミニユエンドをうまく表現しているか。
12. アンサンブルの遠近法、声部や楽器間のバランスがとれているか。
13. バランスのいい和音が響いているか。
14. メロディーの個々の音のバランスは良いか。
15. 曲の持つ色彩感、場面による色（音色）の変化は生き生きと表現されているか。
16. アンサンブルを楽しんでいるか。
17. 音楽的な感動があるか。
18. 曲のイメージを持っているか。（持たせているか）
19. 技術的困難を乗り越える練習方法を具体的に指示できるか。
20. リハーサルや指示にスピード感、ユーモアがあるか。
21. 幼児を楽しませる場面を設定しているか。
22. 他のアドバイスを受け協力を求めているか。

- 23 楽器についての様々な奏法を知っているか。  
 24 計画的、効率的なりハーサルが行われ、無駄がないか。  
 25 幼児に負担がかかり過ぎていないか。

## 6. ま と め

合奏の指導者は、スコアを読み音楽性豊かに表現する指揮者と合奏力を伸ばす指導をするトレーナーの2つの役割を果たさなければならない。

これまで、初心者が指揮者として、トレーナーとして合奏に取り組むための方法について述べてきた。音を出す前に行うスコアリーディングでは、記号やパートの分析をし、鍵盤ハーモニカ合奏により立体感や遠近感について考えた。

器楽の合奏曲は色々な音色を持つ複数の楽器により立体的につくられている。従って、スコアも立体的に遠近感を持って作られている。指導者はスコアに明記されていることだけでなく裏に隠されていることを読み取ることが大切となる。

合奏では、読み取ったものをいかにして演奏者に伝え、実現していくかを考えなければならない。指導の技術は経験が大きく作用する部分があるが、経験の浅い指導者は、合奏指導のチェックポイントで自己点検をしながら合奏経験を積んでいくことが大切であると思う。

選曲や編曲についても考えなければならない。市販されている楽譜はどのような団体にも合うように作られている。しかし、実際に使用する場合には楽器の編成や難易度、演奏者の年齢など実状に合わない場合が多い。

このような場合には指導者の判断が大きな意味を持つことになる。指導者の工夫や判断が演奏に大きな影響を及ぼし、演奏者の無用な負担の軽減にもつながってくる。選曲の判断は慎重にしなければならないと思う。

今回、「宇宙戦艦ヤマト」を合奏指導の教材として取り上げたが、この曲が幼児の合奏にふさわしい内容であるのかについても考えなければならないことでもあると思う。<sup>(\*5)</sup>

これまで、初心者が合奏に取り組むための手掛かりとなることを主に展開し、楽器の奏法や呼吸法、編曲、指揮法、アナリーゼなど、曲をまとめるために必要な最小限のものだけを取り上げてきた。これらは合奏の重要な要素であり、今後の研究課題として取り組んでいかなければならない問題である。

「大人をも感動させる幼児の見事な演奏」そこに至るまでの指導者の苦勞は計り知れないものがあると思う。しかし、その陰には、幼児の苦痛や負担が隠されているのではないかと思うことがしばしばある。結果を求め大人の基準を幼児にあてはめてしまうことは、大変不幸で危険なことである。良い演奏は、優れた演奏技術や合奏力なしにはあり得ないが、技術や派手な演出に片寄る指導は避けなければならない。

指導者の考え方や力量が直接幼児に跳ね返ってしまうことを考え、合奏指導に取り組まなければならないと考える。

幼児にとっても、指導者にとっても楽しい合奏となるような指導法を考えていきたい。